

イエスのことば 第31回

イエスが家に入られると、その人たちがみもとに来た。イエスが、「わたしにそれができる
と信じるのか」と言われると、彼らは「はい、主よ」と言った。そこでイエスは彼らの目
にさわって、「あなたがたの信仰のとおりになれ」と言われた。すると、彼らの目が開いた。
(マタイ 9 : 28~30a)

□イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言（紀元 27 年の春、過越の祭り）を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架（紀元 30 年の春、過越の祭り）、復活、昇天

□文脈の確認

1. 「承」の部において、イエスはメシアとしての権威を示し続けた。しかし、ついに指
導者層は公式に、イエスをメシアではないと拒否した。理由は「イエスは汚れた霊に
つかれている」であった。イエスは、この拒否を「聖霊を冒瀆する罪」と呼んだ。民
族的罪、かつこの世代特有の罪であるメシア拒否は、2つの結果をもたらした。

- (1) この世代のイスラエルに提供されようとしていた神の国は、将来の世代に
- (2) この邪悪な世代に対しては、裁き（紀元 70 年、エルサレム陥落・神殿崩壊）

2. 指導者層による公式拒否を受けて、イエスの宣教活動に大きな変化が起きた。そのよ
うな変化には、二つある。しるしに関して、と、教え方に関して、である。

(1) しるしに関して

- ① 今後、イエスがメシアであることを示すしるしとしてイスラエル民族に与え
られるのは、「ヨナのしるし」のみ、すなわち復活のしるしのみである。
- ② イエスは、その後も奇跡を行ったが、それは、弟子たちに対してメシアとし
ての権威を示すためである。イスラエル民族に対してのしるしは、ヨナのし
るししか与えられない。
- ③ それまでの奇跡は、ご自身がメシアであることを示すしるしとして公然と
人々の面前で行われた。そのとき、癒しなどを受ける人の側にイエスをメシ
アとして信じる信仰があるかどうかは、問われなかった。
- ④ しかし、指導者層による公式の拒否以降は、イエスはもはや公然と奇蹟を行
わない。人々の目のつかない場所に移動して行い、かつ、受ける人の側に信
仰があることが条件となる。

(2) 教え方に関して

① イエスは、拒否を受けたその日、たとえで群衆に語り始められた。その日のうちに、イエスは5つのたとえ話を群衆に、さらに4つのたとえ話を弟子たちに、合わせて9つのたとえ話を語った。そのテーマは、「奥義としての神の国」についてであった。イエスが、たとえ話をういた目的は二つあった。

- 目的の第一、弟子たちには効果的に理解させること。イエスは、群衆にたとえで語った後に、弟子たちには意味を解説した。たとえ話に解説が加わることで、「奥義としての神の国」について、あたかもイラスト付きで理解させるような効果がもたらされた。
- 目的の第二、群衆には、たとえ話を語ったところで止めて、「奥義としての神の国」の情報を隠す。

② メッセージの内容も変わった。それまでは、イスラエルの各地を巡り、町々で、ご自身がメシアであると宣言し、だから神の国は近づいたと説いた。しかし、指導者層による公式の拒否以降は、イエスをメシアであると宣伝することは禁止される（たとえば、マタイ 16:20）。この沈黙の方針が撤回されるのは、マタイ 28章 18~20節の大宣教命令においてである。

3. 公式拒否を受けた日、イエスが群衆に教えている最中に、イエスの母と弟たちが来てイエスを連れ帰ろうとした。このとき、イエスは、地上での血縁関係をすべて切って、信者との霊的關係のみを受け入れた。
4. 拒否を受けた日から、弟子たちに対するレッスンが始まった。
 - (1) レッスン1・・・拒否の日の夕方から、日没後にかけて、ガリラヤ湖を舟で航行中に起きた出来事。イエスが風と波を鎮めて、自然を制する力を持っていることを弟子たちに示した。
 - (2) レッスン2・・・向こう岸に渡ってすぐに起きた出来事。悪霊たちがイエスを恐れる。イエスは悪霊たちを制する力を持っておられることを弟子たちに示した。
 - (3) レッスン3・・・対岸から戻ってから起きた出来事である。長血の女の病を癒し、会堂管理者ヤイロの娘を死からよみがえらせて、病と死を制する権威を弟子たちに示した。
5. 今回の出来事は・・・
 - (1) 弟子たちへのレッスン4。聖書箇所は、マタイ 9:27~34。盲目を制する権威を弟子たちに示した。その直後に、悪霊につかれて口のきけない人から悪霊を追い出し、その人がものを言うようになった。まさに、旧約のメシア預言のとおりとなった。

イザヤ 35:5~6 そのとき、目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる。そのとき、兄の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。

- (2) 続いて、郷里ナザレでの拒否。聖書箇所＝マタイ 13 : 54～58、マルコ 6 : 1～6a
- ① 以前にもナザレで拒否された事件があった（ルカ 4 : 16～31）。その事件の後、イエスは宣教の拠点をカペナウムに置いた。
 - ② 今回の拒絶は 2 回目
 - メシア拒否はこの時点ではまだ、指導者層によるものであるが、やがてイスラエルの民衆レベルにも広がっていく。
 - その意味で、ナザレでの拒否は、以前の 1 回目は指導者層による拒否の前触れ、2 回目は民衆レベルでの拒否となることの前触れである。

□本日の内容

1. 弟子たちへのレッスン 4 【盲目を制する権威】（マタイ 9 : 27～31）

- (1) マタイ 9 : 27 イエスがそこから進んで行くと、目の見えない二人の人が、「ダビデの子よ、私たちがあわれんでください。」と叫びながらついて来た。
- ① 「**ダビデの子**」とはメシアの称号である。「ダビデの子よ」とイエスに呼びかけるのは、イエスをメシアであることを認めてのことであるが、路上で、すなわち公の場で、イエスにそう呼びかけても、もはやイエスは応じない。イスラエルのこのときの世代は、指導者層の拒否により、民族全体としてメシア拒否をしたことになった後だからである。
 - ② しかし、個人としてのユダヤ人が救いを受ける道は残されている。メシア拒否して「邪悪な世代」（マタイ 12 : 39）とイエスから呼ばれた当時のユダヤ人たちが、その邪悪な世代の中から個人的に脱け出て、個人として救いを受けることはできる。そのための条件は、イエスをメシアとして認めることである。
 - ③ よって、二人の盲人が、路上で、イエスに向かって、「ダビデの子よ、私たちがあわれんでください。」と叫びながらついていったのは、彼らが個人的に救われるために必要なステップであった。
- (2) マタイ 9 : 28 イエスが家に入られると、その人たちがみもとに来た。イエスが、「わたしにそれができると信じるのか」と言われると、彼らは「はい、主よ」と言った。
- ① 路上から、家の中に入ると、二人の盲人はイエスのみもとに来た。イエスが弟子たちに命じて、彼らを家の中に招き入れたと推定される。イエスは、彼らの信仰を確認した。メシア拒否の後には、イエスが癒しなどの奇跡を行うときには、【人目につかない所で、かつ受ける側に信仰があること】が条件。

- ② 彼らは、イエスには盲人の目を開くことができると信じていた。旧約聖書中のメシア預言で、そう預言されていたからである。
イザヤ 35 : 5~6 そのとき、**目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる。そのとき、兄の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。**
- (3) マタイ 9 : 29~30 **そこでイエスは彼らの目にさわって、「あなたがたの信仰のとおりになれ」と言われた。すると、彼らの目が開いた。イエスは彼らに厳しく命じて、「だれにも知られないように気をつけなさい」と言われた。**
- ① イエスは、彼らの目にさわって、彼らの目を開いた。この癒しを受ける道は、受ける側に信仰があることである。「あなたがたの信仰のとおりになれ」、イエスのこのことばをもって、彼らの目を開いた。
- ② メシア拒否以降は、イエスをメシアであると宣伝することは禁止される。この沈黙の方針がいつまで続くかという、イエスが復活した後、ガリラヤの山で使徒たちと 500 人以上の弟子たちに、大宣教命令が言い渡される時まで（マタイ 28 : 16~20、I コリ 15 : 6）である。
- ③ イエスは彼らに「だれにも知られないように気をつけなさい」と厳しく命じた。
- (4) マタイ 9 : 31 **しかし、彼らは出て行って、その地方全体にイエスのことを言い広めた。**
しかし、彼らは、喜びを抑えきれず、イエスによって自分たちの目は見えるようになったことを言い広めた。そのため、この話は、その地方全体に広まった。

2. 悪霊につかれて口のきけない人からの悪霊の追い出し（マタイ 9 : 32~34）

- (1) マタイ 9 : 32~33a **その人たちが出て行くと、見よ、人々はイエスのもとに、悪霊につかれて口のきけない人を連れて来た。悪霊が追い出されると、口のきけない人がものを言うようになった。**
二人の盲人が目を開かれて、家から出て行った直後の出来事。
イエスを信じる人々が、悪霊につかれて口のきけない人を連れて来た。パリサイ人も悪霊の追い出しをしていたが、この種類の悪霊の追い出しはできなかった。それができるのはメシアだけであると、パリサイ人たちは人々に教えていた。
- (2) マタイ 9 : 33b~34 **群衆は驚いて、「こんなことはイスラエルで、いまだかつて起こったことがない」と言った。しかし、パリサイ人たちは、「彼は悪霊どものかしらによって悪霊どもを追い出しているのだ」と言った。**
パリサイ人たちは、再度、公式拒否の見解を繰り返し、イエスを拒否した。

3. 郷里ナザレでの2回目の拒否

(1) ナザレの会堂で人々を教えた

マタイ 13:54a *ご自分の郷里に行って、会堂で人々を教え始められた。*

会堂で教えるのは、毎週七日目、安息日である。人々は安息日ごとに会堂に集まり、その日に読むべき聖書箇所が決まっていた。そして、ラビ（教師）が座って、その日読まれた聖書の箇所について人々に教えた。

(2) ナザレの人々は驚いた

マタイ 13:54b~56 *すると、彼らは驚いて言った。「この人は、こんな知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう。この人は大工の息子ではないか。母はマリアといい、弟たちはヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。妹たちもみな私たちと一緒にいるではないか。それなら、この人はこれらのものをみな、どこから得たのだろう。」*

イエスは「大工の息子」と呼ばれている。父親はヨセフと思われていた。ヨセフの職業が大工であったことがわかる。ここでナザレの人々は、イエスの家族の名、すなわち母親のマリアと、イエスの弟たちの名を挙げているが、ヨセフの名を挙げていない。ヨセフはかなり早い時期に死去していたものと思われる。

となると、ヨセフの後を継いで大工の仕事をして一家の生活を支え、4人の弟たちと、少なくとも2人以上の妹たちを育てたのは、イエスであったと考えられる。ナザレの人々は、イエスの育ちと、そしてそのように父親を早くなくして、家業に従事していたことを、よく知っていたのである。イエスが正式にラビとしての教育を受けていないことは郷里のだれもが知っていたことであり、したがって安息日に会堂で聖書を教えることができるようになるはずがないと、思ったとしても無理はない。

4. ナザレの人々はイエスにつまずいた＝メシアとは認めず拒否した

マタイ 13:57~58 *こうして彼らはイエスにつまずいた。しかし、イエスは彼らに言われた。「預言者が敬われないのは、自分の郷里、家族の間だけです。」そして、彼らの不信仰ゆえに、そこでは多くの奇跡をなさらなかった。*

メシア拒否の後には、奇跡を行うときには、受ける側に信仰があることが条件である。不信仰の人々に対しては、奇跡をなさらなかった。